

富谷宿開宿 400 年記念

第 16 回交流会 奥州街道・富谷宿大会

# とうほく街道会議

～開宿 400 年・富谷宿の明日を考える～



令和 2 年

時

11月 6日(金)・7日(土)

所

富谷中央公民館

(宮城県富谷市富谷西沢 13)

## 報告書

表紙図絵：『増補行程記』より富谷新町部分抜粋（もりおか歴史文化館収蔵）

【主催】「とうほく街道会議第 16 回交流会 奥州街道・富谷宿大会」実行委員会

とうほく街道会議、みやぎ街道交流会、東北みち会議、関係 3 町内会、富谷しんまち活性化協議会、関係事業所、富谷市シルバー人材センター、くろかわ商工会、宮城県道路課、国土交通省仙台河川国道事務所、富谷市（企画部・経済産業部・建設部・教育委員会）

【協力】宮城学院女子大学現代ビジネス学部「ビジネス課題研究 I 宮原ゼミ」

【後援】あomorikaiどう会議、いわて街道ネットワーク、ふくしまけん街道交流会、出羽の古道六十里越街道会議、越後米沢街道・十三峠交流会、羽州街道交流会、NPO 法人全国街道交流会、東北地域づくり協会、宮城学院女子大学、河北新報社、読売新聞東北総局、朝日新聞仙台総局、毎日新聞仙台支局、NHK 仙台放送局、TBC 東北放送、MMT ミヤギテレビ、KHB 東日本放送、仙台放送



## 開催趣意

江戸期の奥州街道は、慶長6年（1601）からの仙台築城に伴い、富谷を經由地とする切り替えが行われました。元和6年（1620）に富谷宿（別名：富谷新町宿）が宿立し、本陣の内ヶ崎家は、参勤交代の奥州諸藩や松前藩の大名の宿泊所となり、天保13年（1842）の記録では、富谷宿には酒屋、醤油屋など25業種、75軒の店が軒を連ねていたとされています。

今でも新町地区には、枡形や短冊形の地割りなど、宿場の風景が色濃く残されており、令和元年度には市民が主体となったワークショップやディスカッションを通じて、「しんまち活性化ビジョン」を策定し、宿場町の歴史や景観を生かした「巡りたくなる・歩きたくなる・出会いたくなる”しんまち”」を目指したまちづくりに取り組んでいます。

元和6年（1620）に富谷宿が開宿し、今年で400年を迎えます。今般、富谷宿開宿400年をテーマとして、とうほく街道会議交流会を開催し、地域の方々も含めて広く、この宿場の魅力や取組の内容を知り・考えていただくとともに、東北各地の活動団体との交流により、取組の更なる躍進を目指すものです。

## 《プログラム》

**11月6日（金）** 富谷中央公民館 大ホール

### オープニングセレモニー（13:20～13:55）

- ・オープニング 富谷市紹介VTR上映
- ・主催者挨拶 大会実行委員会 委員長（富谷市長） **若生 裕俊**  
とうほく街道会議 会長 **宮原 育子**
- ・来賓挨拶 衆議院議員 **土井 亨 氏**  
宮城県知事 **村井 嘉浩 氏**（代読：土木部次長 三浦 晃 氏）  
国土交通省東北地方整備局道路部長 **小田原 雄一氏**

### 記念講演（14:00～14:55）

「伊達政宗公が描かれた未来への道」 講師：伊達 泰宗 氏（伊達氏34世 仙台伊達家18代当主）

### 基調講演（15:05～16:00）

「奥州街道の歴史と富谷宿」 講師：平川 新 氏（東北大学名誉教授）

### 分科会（パネルディスカッション）（16:15～17:30）

「富谷宿を生かした街づくりの明日」

- コーディネーター：宮原 育子（宮城学院女子大学教授）
- パネリスト：高田 洋文 氏（月建築設計室代表・地域歴史文化遺産保全活用推進員）  
渋谷 浩一 氏（福島県桑折町商工会会長）  
齊藤文四郎 氏（「グループ風に揺らぐ紅花六田宿」代表）

### パネル展（6日 12:00～7日 11:00）

会場：富谷中央公民館 大ホール

- ・富谷宿、奥州街道、団体活動の紹介パネル

## 2日目：11月7日（土）

### 街道探訪会（富谷宿めぐり）（9:30～14:00）

- 9:30 富谷中央公民館集合
- 9:30～10:30 事前レクチャー（宿場の見どころや歴史を説明）
- 10:30～14:00 富谷宿めぐり 2コース（各コースとも徒歩2km程度）

案内【Aコース】：清水 勇希 氏（富谷市教育委員会学芸員）

【Bコース】：高田 洋文 氏（地域歴史文化遺産保全活用推進員）



## 主催者あいさつ（要旨）



実行委員長（富谷市長） 若生 裕俊

元和6（1620）年9月13日、仙台伊達藩の藩祖政宗公の書状をもって、富谷宿がこの地に開かれて、今年で400年という節目を迎えることができました。

この節目の年に、とうほく街道会議の街道大会をこの富谷の地で開催できますことに富谷市民を代表して心よりお礼申し上げます。

本日は、藩祖政宗公のご子孫の仙台伊達藩18代ご当主伊達泰宗様に記念講演の講師としておいでいただきました。また、日本近世史の第一人者である東北大学名誉教授の平川新先生に基調講演の講師をお願いしております。そして、分科会のパネルディスカッションのパネリスト3名の方々にも心からお礼申し上げます。

今年は富谷市にとって、富谷宿開宿400年という大きな記念の年であり、10月10日には市制施行4年目を迎えた記念日と併せて、街道まつりの本祭り、富谷宿観光交流ステーション（愛称とみやど）のオープンなどの記念イベントを準備してきたところでしたが、新型コロナウイルス感染症の影響であらゆる記念事業が延期となりました。そのような中で、街道大会を開催していただきますことは、我々にとってこの上ない喜びでございます。

今日は素晴らしい皆様方に貴重なお話をいただける機会となると思いますので、ぜひ皆様とともに400年の歴史を振り返りたいと思います。

我々は、先人の方々の400年のたゆまぬご努力によって今を迎えております。私たちは、このことを次世代にしっかりと伝えていく責任がありますので、本日のこの大会を大きな節目にしていきたいと思っております。

ご紹介が遅れましたが、この富谷中央公民館の地には、かつて代官所がありました。ここの玄関口にある松は、当時から代官所の前にあった松ということで、“代官松”の名で親しまれています。富谷にとってシンボルと言える“代官松”のあるこの公民館を開催会場とさせていただきました。

本日は、限られた時間でございますが、どうぞよろしく願いいたします。



とうほく街道会議会長 宮原 育子

とうほく街道会議は、東北地方を街道で結び、東北の歴史、文化、風土といったものを活用した地域づくりに貢献することを目的に、平成17年3月に設立された団体です。平成17年の秋田大会を皮切りに、東北6県の市町村を会場として、毎年交流会を開催し、地域の皆様と交流を深めてまいりました。

宮城県内では、平成20年に仙台市で第4回交流会を、平成26年の第10回交流会は関山街道をテーマに仙台市・作並で開催し、今大会が3回目の開催となります。

今回の大会テーマは、奥州街道・富谷宿の開宿400年ということですが、古くからこの地に暮らしてきた市民の方々は、先祖から受け継いできた富谷の歴史・文化に誇りを持って、守り・暮らしてこられたと思います。一方、最近の富谷市は、仙台市の近郊都市として大変に発展しており、新たな市民との融合が一つの課題であると思います。

考えて見ますと、新しくこの富谷に住まいを持たれた市民の皆さんにとって、富谷は第2のふるさとであり、その2世や3世として、この地で生まれ育ったお子さん達には、この富谷がふるさとになります。そして、この方々もこの富谷の歴史・文化に誇りを持って暮らしていくことが大変に重要なことです。

そのため、富谷宿の歴史・文化をテーマとする取組みは、この地域らしいオンリーワンの街づくりとして大変に意義あることだと思えます。

今年の「奥州街道・富谷宿大会」では、「開宿400年・富谷宿の明日を考える」をテーマに、今日は記念講演会、基調講演会及び分科会、そして明日は街道探訪会を開催します。この2日間で多くの方々に富谷宿を知り、考えていただくとともに、各地の街道の活動への仲間づくりや、地域の活性化に役立てていただければ幸いです。

最後になりましたが、新型コロナウイルス禍の中、富谷市の皆様、また実行委員会などの地域の関係者の皆様のご理解のもと、本日開催できましたことに厚くお礼申し上げます。



## 来賓あいさつ（要旨）



衆議院議員 土井 亨 氏

富谷村生まれ、富谷町育ちの土井亨でございます。今日はご案内いただき、お礼申し上げます。今、日本では、人口減少で大変苦しんでおります。これといった方策というものをなかなか見出すことができていない現状だと思います。政府等でも地方創生の中で、地方の皆さんのアイデア等々も活用させていただきながら、なんとか地方の活力を見出していきたいと努力をしておりますが、それもなかなかうまくいっていないというのが現実だという様に思います。

私は、地方創生というよりも地方の活性化は、やはり地方のみなさんのお知恵によってのみ達成できるのであろうと思っています。そして、ないものねだりをしないことだと思います。ひとつの街がうまくいくと、金太郎飴の様にうちもやりたいという形で、ないものをねだってしまう。それをやっても所詮その時だけだと思います。

それよりも私たちが住むそれぞれのふる里や街にあるものを探し出して、あるものをしっかりと活用していくことが、地方創生、地方活性化の基本にならなくてはならないと常日頃から考えております。

温故知新という言葉がありますが、私たちは古いものをしっかりと胸に秘めながら、伝統や歴史というものに誇りを持ちながら、新しい街を作るために進んで行かなければならない。伝統や文化というものを捨てて新しいものを目指しても、それはまったく無意味だという様に思っております。

開宿 400 年という中で、このような大会を開催するというのも、富谷という町の歴史を大切しながら、前に進んで行く、行こうよという市長さんをはじめ市民の皆さん方の思いがあつてのことだと思っております。

富谷が発展、進展をしていくために私も微力ではありますが、しっかりと支えさせていただきますので、市民の皆様方も心をひとつにして、この素晴らしい富谷の歴史を繋いで行っていただきながら、新しい街を作っていくためにもご努力をさせていただくことをご祈念申し上げて、お祝いの挨拶にかえさせていただきます。



宮城県知事 村井 嘉浩 氏

江戸時代に奥州街道の宿場町として栄えた富谷宿は、開宿から今年で 400 年を迎えました。仙台伊達藩祖伊達政宗公の仙台北城築城に伴う奥州街道の経路地変更によって開宿し、奥州諸藩や松前藩の参勤交代の宿泊所として利用されるなど、大いに賑わいを見せていたことが記録に残っております。

当時の面影が色濃く残る「しんまち地区」における「街道まつり」の開催や、「富谷茶復活プロジェクト」など、歴史と景観を活かした地域活性化の取り組みに対しまして、関係者の皆様に心より敬意を表します。

また、とうほく街道会議の交流会を通じて、地域の方々も含めて広く、宿場の魅力や取組みの内容を知っていただくとともに、観光や地域経済の発展に繋がる良い機会になることを期待しております。

県といたしましても、令和という新たな時代において、真に豊かな地域づくりに向けて、これからも地域の持つ歴史を大切にするとともに、地域間交流に力を入れ、持続的な地域社会の構築に全力を尽くしてまいります。

（代読：土木部次長 三浦 晃）



東北地方整備局道路部長 小田原 雄一 氏

若生市長、宮原先生はじめ皆様方には、日頃より国土交通行政、また道路行政にご理解とご協力を賜りお礼申し上げます。

富谷宿と申しますと、思い浮かぶのは内ヶ崎酒造さんの日本酒「鳳陽」でございます。1620 年の富谷宿の開宿から 41 年後に創業された宮城県最古の酒蔵ということなど歴史の重み、深みを改めて感じるところでございます。

この交流会は、ご当地の開宿 400 年を迎える富谷宿をテーマとして、宿場の魅力や取組みの内容などを、東北各地の活動する皆さまと共有させていただき、取組みの更なる躍進を目指すためと伺っています。

富谷宿もそうでございますが、かつて街道が人々のコミュニケーションを育む場であった様に、地域の工夫で魅力的な空間を創出することが重要であると私もは思っているところでございます。

本日も活発な意見交換等によって、地域間の交流や連携の促進、また観光振興によって地域の活性化というものに繋がっていくことを期待しているところでございます。



## 記念講演

### 「伊達政宗公が描かれた未来への道」講師：伊達 泰宗 氏（伊達氏 34 世 仙台伊達家 18 代当主）

慶長遣欧使節帰朝 400 年の今年、仙台伊達家 18 代ご当主の視点からその意義を探るとともに、現在を生きる私たちが未来の為に果たすべき役割とはなにか、そして、今この時、自らがやるべき事に向けて全能力を尽くしたならば、その試練と共に必ず未来への道は拓かれると講演の中で述べられました。



### コラム 1

奥州街道 富谷宿 開宿 400 年記念事業

### 富谷宿観光交流ステーション（愛称：とみやど）

内ヶ崎醤油店の跡地を活用し、地域の歴史的な資源や背景を活かした観光交流の拠点及び起業・創業の実践・チャレンジの拠点整備を進めており、令和 3 年 4 月 17 日にグランドオープンの予定です。

施設配置図



イメージ図



① 内ヶ崎作三郎記念館	(1F) 展示ギャラリー・インフォメーション管理室 (2F) 会議室・宮城大学共創ラボ
② マルシェ広場	マルシェなどの物販イベントのほか、チャレンジ館や古民家共有スペース
③ イベントステージ・野外交流サイト・芝生広場	イベントステージ・野外交流サイトは主にイベントに、芝生広場は休憩スペース
④ 古民家	茶屋（カフェ）
⑤ チャレンジ館	ジェラート店、中華料理（拉麺店）、定食屋、惣菜店
⑥ イベントスタジオ	陶芸教室・物販
⑦ 蔵	ハチミツ関連商品の物販
⑧ 軒下一間家（いっけんや）	内ヶ崎作三郎記念館の前方軒先で、物販の場所として活用



## 「奥州街道の歴史と富谷宿」

講師：平川 新 氏（東北大学名誉教授）

富谷宿の宿立てまでの背景として、政宗公以前の戦国時代の状況、政宗公の仙台築城に伴う大規模な国土（領土）改造事業の説明がありました。そして、奥州街道を中心とする街道政策と富谷宿の歴史の変遷を説明いただきました。また、歴史を踏まえた新しい街づくりについても提言も頂きました。

これからますます発展していく富谷市ですが、富谷宿が開かれてから400年の間、どのような歩みをしてきたのかということについて、いくつかの事例や資料などを紹介しながら振り返ってみたいと思います。

### I. 政宗公による大規模な国土改造事業

この富谷宿は、伊達政宗公の国づくりの一環としてつくられました。最初は政宗公の国づくりから話を進めていきたいと思います（図-1）。

・ 仙台に移る	1601年
・ 城をつくる	1601年～
・ 城下をつくる	1601年～
・ 街道をつくる	1601～1610年代
・ 宿場をつくる	1601～1610年代
・ 木挽堀(貞山運河)をつくる	1601年～
・ 寺社をつくる	1604年
・ 新田開発をする	1605年～
・ 慶長遣欧使節を派遣する	1613年～

図-1 政宗公の国土改造事業

伊達家は、1591(天正19)年に豊臣秀吉によって米沢から岩出山に転封を命じられました。

岩出山の時代は大変短くて10年程度でした。政宗公は、京都に長くいたため岩出山時代には、あまり領国の経営は考えられなかったと思います。

仙台に居を移してから、仙台城の築城が1601(慶長6)年に始まり、同時に城下町を造って町割りをしていくのですが、城を造り、まちを造るということは、街道も整えていく必要がありますので、仙台城築城と同時に、奥州街道を新たに整備していくということになっていくわけです。街道や宿場は、1600年代から1610年代にかけて整備されています。その一環として、ここ富谷宿も立てられました。木挽堀は、今は貞山堀と言われていますが、現在の福島地方から運ばれてきた様々な物資や食料、材木等を仙台に運ぶために阿武隈川と名取川を繋ぐ水運が必要となり整備されたのでした。

そして、ハード整備だけでは国の運営は安定しませんので、人々の心の安定を求めて、瑞巖寺や大崎八幡宮を始めとする多くの寺社を各地に建立しています。

また、江戸時代には、新田開発を積極的に進め、荒地を開発していったことで、田の面積が激増していきます。新田開発は全国的な傾向でしたが、伊達藩の田の面積の増え方は驚異的なものがありました。官民挙げて、力を入れたということだと思います。だからこそ、江戸の米の多くを仙台米が占めるようになり、最大の米どころとなったわけです。

さらに、国際的な関係も展開しています。未来を拓く構想のもとに、1613(慶長18)年に支倉常長ら慶長遣欧使節が派遣されました。

まさに仙台が開府されてから、様々な事業に着手していることがよく分かります。しかも、これらは1601年からの十数年の間に整備されていますので、非常に短期間に成果を

挙げたこととなります。これは一気呵成に実行するという資金力とリーダーシップの表れだと思います。家臣に対しての指示的確さが無ければ、この大事業を推進することはできなかったと思います。また、政宗公ひとりで、このような発想や実行ができるわけでもありません。様々な分野の有能な家臣を上方や江戸からもスカウトしており、その家臣達が、どのように国づくりを行うのかという企画を政宗公に提案し、認められたものが次々に着手され、壮大な国土改造事業が実現したと理解したいと思います。

政宗公は、岩出山から仙台に居城を移していますが、仙台という場所は、東西南北の主要街道、塩釜や石巻の港、それから水運といったことも含めて非常に立地が良いということになります。「伊達領国の中心に移した」と言われますが、実は関ヶ原合戦の前に、家康は政宗公を味方につけるため、百万石を与えるというお墨付きを出していました。その時には、山形県の長井地方や福島県の伊達・信夫あたりも領地に入っており、百万石の領地の中では、岩出山に置くと北に寄り過ぎるので、中心あたりの仙台になったわけです。単に中心というだけではなく、東西南北の交通の要所でもあるということで仙台が選ばれたということになります。しかし、和賀一揆をそそのかしたということで家康に睨まれ、お墨付きは反故にされ、現在の私たちが知っている62万石となり、結果として、領国の南に寄る形になったのでした。

### II. 中世の城館と権力構造の変化

「城館」とは、大きなお城の構えをしたものから「館」と言われるやや小規模なものも含めたものになります。仙台藩全域では、城館が約1,300ヶ所あったということが分かっています。長期間に渡って、全ての城館が使われていたかは、確かではありませんが、そのかなりの部分が戦国時代までは存在していたと理解して良いと思います。

しかし、江戸時代に入ると、それが大幅に整理されて、わずか50ヶ所となります。江戸時代には、徳川幕府が「一国一城令」を出しています。仙台の場合は、仙台城と片倉小十郎景綱の白石城だけは特別に認められています。また、戦国時代までは城として活用され、江戸時代になって「要害」という言葉に代えられた城館を21ヶ所残しました。その代表的なものが涌谷、登米、岩出山になります。さらに、もう少し小さな館として、仙台藩では「所」という言い方をしたものが27ヶ所残されています。1,300あった戦国時代までのお城のうち、わずか60ヶ所が残りました。



図-2 伊達の21館(要害)



残された21か所の要害は、仙台領全域に建てられています(図-2)。要害は軍事拠点ですが、北部では南部藩との境目を警護する必要があり、やや厚めの要害が設けられています。中央部は涌谷や登米あたりに多くなっています。この地域を治めていた大崎氏、葛西氏は、伊達氏と争った戦国大名です。そこが伊達氏の領地となりましたので、大崎氏、葛西氏の家臣達は伊達氏にとって、危険な存在となります。その謀反などを抑えるために、この地域に要害が設けられています。いまでもこの地域には、大崎や葛西の末裔であることを誇りにしている方が少なくありません。南の方が一番多いのですが、これは徳川家への備えということになります。徳川家と政宗公は非常に友好な関係を持っていたと言われていますが、2代将軍徳川秀忠のときに、謀反の疑いをかけられ、出兵の用意までされていたことが明らかになっています。いつ徳川将軍家が攻めて来るか分からないため、このような形で城館の配置をしたと理解していいだろうと思います。

ここ黒川地域は、大崎氏と伊達氏の勢力の間に挟まれた地域で、黒川氏という戦国大名のやや小ぶりの存在の国衆がいました。大崎氏の方に傾いたり、伊達氏の方に傾いたりしないと生き延びていけなかったわけですが、豊臣秀吉が小田原の北条氏を攻めた時に、政宗公は迷って遅参し、白装束で覚悟して行った逸話が残されています。しかし、黒川氏は参戦せず、秀吉にお家を断絶させられてしまいました。そして、黒川氏が持っていた領地は、伊達の支配下に入りました。

現在の富谷市域の戦国時代末期には15の城館(図-3)があったと記録されています。宮城県全体では、もっと多くあったと考えられています。仙台領で1,300もあったことは意外な話だと思いますが、村の国衆たちが、それぞれに本拠を構えていたということになります。

富谷市域には中世の城館が15もあった!	
1. 馳取城跡	9. 熊谷館跡
2. 門前城跡	10. 鳥屋又館跡
3. 鶴巢館跡	11. 熊野館跡
4. 堂屋館跡	12. 鹿鼻館跡
5. 南橋城	13. 兵六館跡
6. 大童館跡	14. 小谷館跡
7. 奈良木城跡	15. 小野目館跡
8. 小国館跡	

図-3 富谷市域の中世の城館

ところが、江戸時代に入ると、富谷市域からお城が全てなくなってしまいます。富谷市域以外の吉岡、宮床、中新田には小型のお城である要害が残されました。富谷市域に1つの城館も残らなかったということになりますが、それは戦国時代と江戸時代の社会や権力のあり方が大幅に変わってしまったからだとということになります。

戦国時代には武士の多くは村方におり、家臣は農業をやっていました。黒川氏には黒川三家老がいて、現在名前が知られているのが渡辺家、若生家、そして内ヶ崎家です。その国衆たちの下にも多くの武士たちが結集をしていました。豊臣秀吉と徳川家康の全国制覇によって権力形態が変わり、黒川氏が滅亡した時には黒川三家老は土着し、百姓身分で帰農することになります。渡辺家が熊谷地区、若生家が関ノ川地区、内ヶ崎家が鶴巢地区だと言われています。後に黒川三家老のうちの内ヶ崎家が政宗公によって富谷宿開宿を命じられます。

実は仙台藩の権力構造は他藩と違い、やや複雑な構造となっています。仙台北下に国衆や地侍が集まって侍屋敷を造

ることと同様に、各地の要害に地侍が集まって館下町を造るという二重の構造になっています(図-4)。

侍達が大名の直接的な指揮下にいないということは、下克上の非常に不安定な状態をもたらしますの

で、藩主の近くの城下に集めて統制を強めるというのが城下集住の一つの要因となっています。したがって、戦国時代に1,300の城館があったということは、それだけ地域の力や軍力が分散していたということになります。家臣を城下や要害の下に集め、各地にある軍力を削減して1か所に集中させ、その軍力を藩主の直轄下に置くことで、藩主の力は、非常に巨大なものになっていくこととなります。

これを全国的に見ると参勤交代で江戸に藩主が集中し、將軍の直接的な支配下に入るということです。ただ平和な時代に入ると戦争の指揮ではなく、江戸城の大改造や堀の改修などの天下普請をさせられたりしています。このように権力構造が大きく変わったのが江戸時代になります。

富谷市域には、今も中世の城館の遺構が15も残っていますので、城館巡りはとても面白いと思います。また発掘調査も行われており、報告書なども出されていますので、参考にしながら地域の宝として、もう一度見直して行くことは非常に効果があるのではないかと思います。

### III. 奥州街道と富谷宿

1603(慶長8)年に江戸幕府が成立しました。人々を江戸に集中させるためには街道が大動脈になります。それ以前は京都に向けて全ての街道は繋がっていました。それより前の東日本は鎌倉となりますが、江戸幕府が成立しますと「すべてが江戸に」ということで整理をされていくこととなります。一斉に全国的な整備が行われますので、列島大改造のひとつになっていくわけです。

この地域の街道の話になりますが、戦国時代までは岩切・利府を通る奥大道がメインルートでした。政宗公が青葉山に仙台城を築くことによって、奥大道から離れてしまいますので、西に奥州街道を新たに整備することになります(図-5)。

城下を造り始めたのが1601年です。最初は中田宿と仙台北下だったのですが、距離が長いので、1612年に長町宿を立てました。

増田宿は戦国時代から奥大道の宿場だったであろうと考えられています。北に七北田宿がつくられ、富谷宿は、1618(元和4)年に政宗公が内ヶ崎の当主に富谷に宿を立てるようという指示を出しました。2年後の1620年に宿場としての

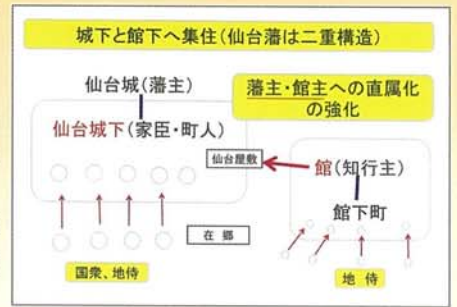


図-4 仙台藩の地方知行制



図-5 奥州街道の成立



宿立が政宗公によって認可され、そこから今年で400年となるわけです。

文化庁の補助で宮城県教育委員会が行った「歴史の道調査報告書」(昭和54年)を見ると、昔の奥州街道沿いに現在の国道が拡幅されて整備されていることが分かります。国道整備は、一番効率の良いルートを選んで整備していきます。元々あった奥州街道のほぼ8割、9割くらいが利用されているということは、この街道が当時からも現代的視点からも非常に合理性があったということになると思います。昔の人の土木の技術や見る眼というのは、かなり適切で、昔の人だから何も分かっていないだろうと考えるのは大間違いということになると思います。

次は富谷宿を造るという話になりますが、徳川幕府が江戸ルートの全国整備を行う中で、奥州街道の整備も行われます。江戸の千住から奥州の最北端の三厩まで行くわけですが、この街道は各藩を貫いていますので、自分の藩域の中の整備はその大名が責任を持たなければいけません。仙台藩は、南から北の南部藩の境までの整備を請け負うということになります。



図-6 富谷宿をつくる

図-6は、宿場町整備の事情を書いた古文書で、1720(享保20)年の史料です。「政宗公が内ヶ崎筑後に宿場の開設を命じた」ということが書かれています。その命を受けた内ヶ崎筑後は、近村の者に移住を求めました。宿場を造るためには、宿場としての街並みが必要になります。当初13軒だった家が、2年後には倍増し、20~30軒になったので、宿場として機能するようになりました。宿場は、荷物を次の宿場まで馬で運ぶ荷継ぎをする場所になります。荷を運ぶ馬の疲労も考え適度な間隔で置かれなければいけないので、富谷宿の北には吉岡宿、南には七北田宿が置かれています。

しかし、「新しく宿場を造るから富谷に集まってくれ」と言っても、そう簡単には人は集まりません。江戸時代は封建時代で、領主が命令して強制移住させた20~30年前までは考えられていましたが、決してそうではありません。やはり、モチベーションを働かせるような政策的な誘導が必要になるわけです。宿場に土地を与えられても、年貢を納めるのであれば、モチベーションも高まりませんので、富谷新町に移転する場合には移転料として金1切(金1両は4切)を下付し、年貢は3分の1にするとされました。さらに、集落には年貢以外の様々な役が村々にかかりますが、それも免除するなどの特権を与えることで、富谷新町に移った方が楽になり、宿場になれば生活も成り立ちやすくなるということで、宿駅として1620年に発足しました。

宿立は富谷宿以外にも行われていますが、これは地域おこしの起爆剤になっています。他ならぬ政宗公が仙台に移ることによって、この地域一帯は大変貌を遂げることになりました。政宗公がこの地域全体に大きな改造をもたらし、各地に新しい勢いが生み出されてきたということになると思います。

#### IV. 富谷宿の暮らし

現在も富谷宿の様子を示した絵図などが残っています。

図-7は、1823(文政6)年の「富谷村御絵図」からの抜粋です。宿場前後の枡形や熊野神社が描かれています。

図-8は、富谷町誌の写真版をトレースしたもので、明治初年の「富谷村字町地囲図」というものです。

地割がされており、1軒の間口が7間(12.6m)、奥行きが30間(54m)ですが、現在ではだいぶ細分化されていると思います。この宿立の大きな役割を果たした内ヶ崎家は一番広い屋敷地を与えられていることが、地割図を見てもよく分かります。地割図と現在のまち並みのあり方を比較すると、変化の過程を追いかけていくことができるだろうと思います。



図-7 富谷宿の枡形の街

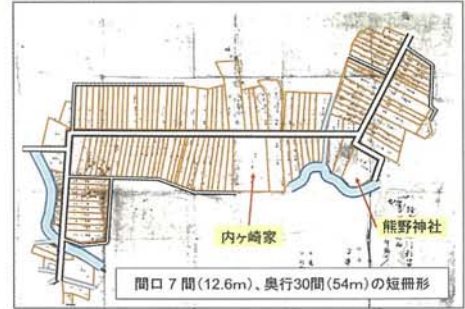


図-8 富谷宿の地割

濁り酒、煮売り	14	塙屋	3
豆腐	9	塩問屋	2
荒物	9	煙草	2
五十集いさば	9	小鍛冶	2
菓子	8	錫屋	2
穀物問屋	7	清酒	2
小間物・荒物	7	八百屋	1
旅籠屋	6	湯屋	1
太物・古手・荒物	6	蒔鞠	1
室師	5	鉄問屋	1
味噌・醤油	4	粉	1
染師	4	桶屋	1
綿屋	3	材木屋	1
煮売り	3	合計	114軒

図-9 富谷宿の商売

図-9は、1842(天保13)年の富谷宿の商売書き上げです。一杯飲み屋14軒、豆腐屋9軒、荒物屋9軒、五十集屋という海産物の干物屋、味噌醤油、米つき屋などがありました。

富谷宿には、多くのお店や宿屋も旅籠屋もありました。大名が泊まるのが本陣あるいは脇本陣です。なお、旧佐忠商店は今年、国の登録有形文化財に黒川地域で初めて登録が答申されました。建物自体は明治後期ということですが、雰囲気を残す建物です。

ここまでの話では、宿場は大いに繁盛したように思えるかもしれませんが、もちろん繁盛もしたと思いますが、記録として残りやすいのは、繁盛したことよりも、困難の記録です。

図-10は、1720(享保20)年、宿民からの願書が残されています。要約すると、年貢が3分の1免除されていたが、その特権も十数年前に無くなり、宿場の住

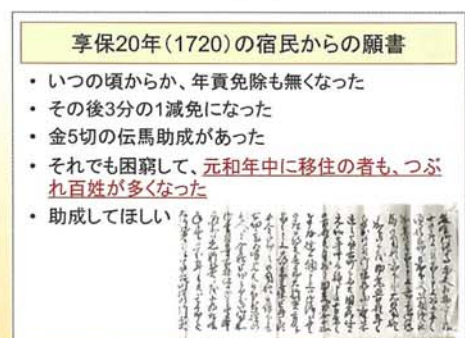


図-10 困窮する宿民(1)



民が陳情して、また3分の1の減免になったということです。さらに、伝馬の助成について書かれています。伝馬というのは、次の宿場まで馬で荷物を運ぶのですが、特権を与えられた見返りとして、その馬を提供するのが宿場住民の仕事になります。もちろん有料で運ぶのですが、民間の相場よりもやや安い料金で運んでいました。ところが、荷物の量が増えてきても、安い料金で運ばなければならないので困窮してきたわけです。荷物を運ぶ仕事ばかりで、農作業も十分にできず、元々移転してきた住民たちも宿場機能の維持が大変なので助成して欲しいという願書になっています。

もう少し後の1746(延享3)年の図-11の史料には、伝馬役は64軒あり、ここにも1軒につき金7切の助成があり、

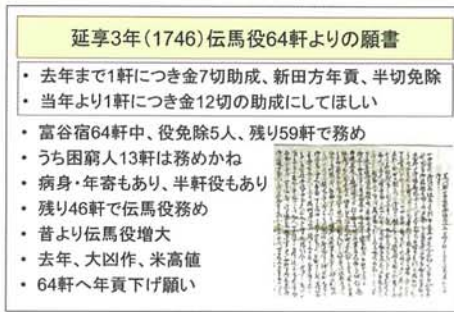


図-11 困窮する宿民(2)

うなことが書かれています。

富谷宿64軒中、伝馬役が免除されている村役人を除いた、残り59軒でそれを務めていて、そのうち13軒は病身や高齢なので、「残りの46軒でこの仕事は大変です。なんとかしてください。」ということが書かれています。

「増補行程記」という絵図があり、江戸から盛岡までの街道の絵図です。その中の富谷新町の部分には(本報告書表紙絵図参照)、名物はお茶で、宿場の中に飲み屋を含めて茶店が多くありました。地酒屋という看板も出ています。熊野神社もあります。宿場の出入口には木戸があり、治安を守るために夜の出入りを止めていました。

図-12は七北田宿側から来た道筋になります。街道周辺は残らず茶畑でした。「茶元源内屋敷」や「茶畑おびたたく」とあり、茶作りの様子ということで、「馬屋でつくった糞を仕込んで肥やしとして茶畑にすき込むと美味しいお茶ができる」ということが書いてあります。

富谷はお茶の復活を図っていますが、馬の糞が一番良いそうですので参考にいただければと思います。

## V. 歴史と新しさが共存したまち“とみや”へ

図-13は、旧佐忠商店にあったお茶袋のラベルです。両側は「富谷村茶師」「渡邊屋源内」と書いてあります。これは黒川三家老子孫の源内さんがお茶の栽培を始めたという言い伝えが残されています。中央の「さんせう」は「さんしょう」と読めますがその下が直ぐ読めませんでした。最終的に「山椒こくり茶」と読みました。「こくり」には「手もみ」という意味があります。これは山椒の葉を手もみでお茶にした「山椒こくり茶」だということが分かりました。

お茶屋さんで聞いてみたところ、夏に冷茶にすると爽やかでとても飲みやすいというお話でした(図-14)。英語では「ジャパニーズペッパーティー」というみたいで、「山椒茶」というと抵抗があるかもしれませんが、ちょっと洒落たこの名前で、ぜひ富谷で新しく栽培して売り出していだくと土地の産物になっていくのではないかと思います。



図-14 山椒葉のお茶

富谷では、ブルーベリーやハチミツなどを新しい産物にしようと努力しておられます。その中に富谷茶も出てきました。内ヶ崎酒店のお酒もあります。先ほどの「山椒こくり茶」ジャパニーズペッパーティーも良いですね。そして、富谷は、新しいまちとして地域が動き出して、非常に大きな形を創ってきています。新しい生活が新しい住民によって生まれ、新しい職場がたくさん作られてきているということです。この様に「とみやの」ということを地域ブランドのネーミングとして様々なものにつけていくと、富谷の知名度、発信力が非常に高まっていくのではないかと思います(図-15)。

政宗公が富谷に新しいまちをつくり、そこから富谷が始まったわけですから、富谷の新しいを見つけ、さらに富谷の発展を期待したいと思います。

政宗公がつくった富谷新町、これは「アーカイックとみや」だと思います。アーカイックというのは古風であるということですが、ただ古いということではありません。芸術性がある

ということで美術用語としてギリシャ美術に対して使われたりします。そして、今発展しつつある「ニューシティとみや」。単なるニューシティーはありません。歴史の香りがするニューシティーということで、この開港400年を記念して、改めて皆さんと一緒に歴史と新しさが共存したこの地域の発展が進んでいくことを期待したいと思います(図-16)。

図-16 とみやの明日の提案



図-13 お茶袋のラベル

富谷では、ブルーベリーやハチミツなどを新しい産物にしようと努力しておられます。その中に富谷茶も出てきました。内ヶ崎酒店のお酒もあります。先ほどの「山椒こくり茶」ジャパニーズペッパーティーも良いですね。そして、

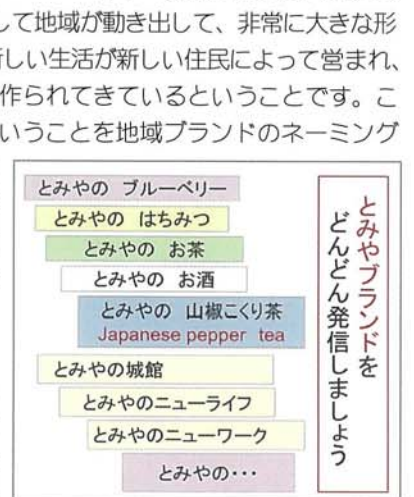


図-15 とみやブランドの発信

政宗公がつくった富谷新町、これは「アーカイックとみや」だと思います。アーカイックというのは古風であるということですが、ただ古いということではありません。芸術性がある

ということで美術用語としてギリシャ美術に対して使われたりします。そして、今発展しつつある「ニューシティとみや」。単なるニューシティーはありません。歴史の香りがするニューシティーということで、この開港400年を記念して、改めて皆さんと一緒に歴史と新しさが共存したこの地域の発展が進んでいくことを期待したいと思います(図-16)。

(※図は、講演の画像から抜粋・編集したものです。)



「富谷宿を生かした街づくりの明日」

宿場を生かした街づくりに取り組む東北各地の活動から学び、富谷宿を生かした明日について考えました。

- コーディネーター：宮原 育子 (宮城学院女子大学教授)  
 パネリスト：高田 洋文 氏 (月建築設計室代表・地域歴史文化遺産保全活用推進員)  
 渋谷 浩一 氏 (福島県桑折町商工会会長)  
 齊藤文四郎 氏 (「グループ風に揺らぐ紅花六田宿」代表)

**宮原育子氏 (以下：宮原)** 先ほど講演を聞ながら、富谷宿の歴史の深さ、広がりを感じさせて頂きました。

今日は、宿場の街づくりの大先輩の渋谷さんと齊藤さん、そして地元の高田さんに富谷宿の状況をお伺いしながら、宿場を生かした街づくりの取組について、色々学んでいきたいと思ひます。

最初に自己紹介を兼ねて、皆さんの取り組みの紹介をして頂こうと思ひます。桑折宿の渋谷さんからお願いします。

◆活動の紹介◆

**渋谷浩一氏 (以下：渋谷)** 桑折 (こおり) 町は福島県境の国見町と福島市の間にあります。桑折で、奥州街道から羽州街道と相馬中村街道が分岐しています。伊達氏の150から200万石と言われた天正17 (1589)



図-1 桑折の追分 (1)

年頃の領土の中心が伊達郡の桑折でした。

図-1は文政年間 (1818～31年) の『諸国道中商人鑑』

の奥州街道と羽州街道の追分で、ここに「仙台と山形へ十八里、江戸へ七十三里」などと書いてあります。絵もあって道標、庚申塔、柳の句碑、しだれ柳、御休憩もありましたが、道路整備のためありませんでした。ところが不明の道標が見つかり、平成18年に5点セットで復元整備しました (図-2)。



図-2 桑折の追分 (2)

また、「桑折宿難巡り」、「竹灯籠祭り」、「街道祭り」なども実施しています。そのほかに、「伊達氏ルーツ桑折宿と奥州・羽州・相馬中村街道探訪ツアー」を4コースで実施しています。



図-3 桑折宿平面図

桑折宿は、図-3の様にL字になっており、寺院が23箇所と多くあります。右上の写真は旧伊達郡役所で、現存して公開しています。

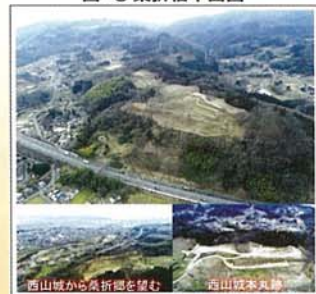


図-4 桑折西山城

図-4は国史跡の桑折西山城です。高館城や赤館城とも

いわれる中世の城で、伊達氏の居城でした。右手前から本丸、二の丸、中館、西館があり、本丸から阿武隈川や福島の高野山まで一望出来ます。

初代朝宗公から桑折高館に居城し、四代目の政依公が達五山を建立しています。仙台の北山五山は、元々は伊達五山です。

街道連携ですが、宮城県七ヶ宿町と山形県高島町と桑折町の3町で連携しています。この連携のきっかけが「伊達往還道と御城米の道」です。屋代郷 (高島) の米を桑折の阿武隈川上郡河岸、貞山堀経由で、松島湾の寒風沢島から江戸まで運んでいます。また、今はホテルの連携も始まっています。この民間の街道交流がきっかけで、3町が県を越えた防災協定を結んでいます。

**宮原** 桑折は宿場のほかに、広域な伊達氏ワールドとして、他の自治体と連携の活動が広がっているということです。この様に街道というツールは、色々な地域と繋がるという可能性を持っていると思ひます。

次は東根市の羽州街道六田宿の齊藤さんをお願いします。

**齊藤文四郎氏 (以下：齊藤)** 私達は「風に揺らぐ紅花六田宿」というグループです。東根市はさくらんぼだけで、紅花なんかかまってらんない。さくらんぼの時期に紅花へ行くくと市長に「なにお前ら、何しているのだ」とごしゃがれます。そういう状況の中で、私達は地域の活性化を目的に立ち上げました。約280戸の六田という羽州街道沿いにある街です。



図-5 活動紹介 (1)

私達の活動ですが、キーワードの第一に「紅花」、そして「松尾芭蕉」です (図-5)。芭蕉が1689年に山寺の行き帰り六田宿に寄って食事しています。何をもてなしたのだろうか?ということですが、やっぱり麩を食べたのだろうかということ。現在、六田宿には麩の専門店が3軒もあるちょっと珍しい所です。

紅花は、地元の小学校4年生と種まきから収穫、紅花染めをして、最後に約100名の子ども達が、紺 (かすり) の半纏など着て行列をします。こういう活動をしているとマスコミが来てくれる。要するにメディアへのサービスもしています。

第二のキーワードに「飛脚与次郎とお花の悲恋物語」があります (図-6)。与次郎は白狐、お花は宿屋の娘、この二人がムカサリ (結婚) すっ



図-6 活動紹介 (2)



だという悲恋物語です。間も涙・語るも涙の素晴らしい物語で、市民ミュージカルを公演し、私も出演しています。

これは佐竹の殿様が関係する話ですが、佐竹の殿様は非常に六田を愛したと思っています。なぜかという本陣のない六田宿ですが、殿様は行き帰りに昔六田を造った青山家に必ず寄ってお休みになります。なしてがと言うと、六田の水が素晴らしくおいしいからで、佐竹の殿様のために六田宿はあったのです。

この2つのキーワードを利用して、歴史の色々な勉強・研修を子ども達と一緒に実施しています。やっぱり学校を取り込むというのは、子どもや父兄とも仲良くなれるので非常に良いです。こういうことを一生懸命していると、市では知らないふりをしていたけど、徐々にこちらに近づいて来ます。市の広報も、この頃は「ど〜れ、市のほうで宣伝してけっから」ということで、協力して頂いています(図-7)。

私は東根市観光物産協会の責任者などもしていますが、結局観光物産協会の事業として取り組むことが出来ていません。

私たちの活動は大したことはしていないのですが、無理しないで真面目に活動していると、いつか誰かが助けてくれる。そして面白いから止められなくなる。あんまり力を入れるとくたびれて、すぐやんだぐなります。私達はそんなことで活動しております。

**宮原** 親しみある山形弁も交えて、極力行政に頼らない街づくりに子ども達を巻き込みながら活動をされているというお話でした。六田は佐竹のお殿様も愛した美味しい水がある、非常に良い宿場町なのだと思います。

最後に、地元の高田さんをお願いします。

**高田洋文氏 (以下：高田)**

図-8は富谷市の全域ですが、南の仙台から団地化が進み、山の緑が随分少なくなってきました。

司馬遼太郎の「街道をゆく」のプロローグに「街道は空間的存在であるが、しかし翻って考えれば決定的に時間的存在である。」とあります。私は「人間的存在である。」とプラスし



図-7 活動の成果



図-8 富谷市全域



図-9 新町通り



図-10 内ヶ崎酒造店

て、これは富谷の建築の在り方だと解釈して、建築と地形的なものをご案内します。

新町通りの中心部の直線が延長 390m、北側の旧国道 4 号まで 250m、南側は国道 4 号まで 450m です。

一軒あたりの区割りは大体 6.3 から 7m の間口、奥行きが 100m 程度の細長い敷地です。

図-9 が新町通りで、東面と西面の高低差が 5m 位あり、坂の道になると思います。

図-10 が内ヶ崎酒造店・旧本陣跡で、切妻風の黄色い壁が象徴的です。明治維新 2 年前の 1866 (慶応 2) 年に全焼して、酒屋の間取りに変わったのだと思います。この前、岩手で見つけた本陣の平面図では、御成門が左側にありましたが、富谷町史に玄関は、4 つの柱と立派な虹梁、反り破風、狐格子と書いてあったのですが、有壁本陣の御成玄関とはほぼ同じだったということが分かり、有壁で確認したらその通りでした。



図-11 内ヶ崎酒造店別邸

内ヶ崎家には、図-11の別邸があり、今は公開していませんが、池があり回遊式庭園になっています。対山閣という素晴らしい建物もあります。

図-12 は山田本家で、前面が土蔵造です。母屋の後ろに書院造の二間があります。珍しい「駒つなぎ石」(写真右下)が、分家の山田海洋堂にあります。

また、隣の昭和 45 年築の旧町役場は改修し、新町の活性化プロジェクトの基幹をなす「富谷市まちづくり産業交流プラザ“TOMI+”(とみぶら)」と、3階は市の民俗ギャラリーになっています。これも新町にとっては大変貴重なものだと思います。

図-13 は旧佐忠商店(富谷宿)です。明治後期建築の店蔵は、地場産品と雑貨、店主所蔵の富谷宿の史料も展示しており、富谷の生き字引みたいな佐藤紀雄さんが案内しています。店蔵(主屋)と昭和前期の門と共に令和 2 年 7 月に国登録有形文化財に登録が答申されました。この建物の特徴は、軒が放射状の垂木(扇垂木)となっています。また瓦止めは、波紋の鰻(こて)絵です。

図-14 は旧菅野邸で、大正 7



図-12 山田本家



図-13 旧佐忠商店



図-14 旧菅野邸



年築の町屋としては非常にきれいな造りです。壊されそうになったが残して貰い、今は“café hito no wa”として営業しています。

図-15は丹野邸です。フランク・ロイドという帝国ホテルライト館で有名な建築家の弟子が作ったのではないかと洋館です。昭和5年の建築で、とてもハイカラです。我々の小さい頃は、電気・ガスがあり、トップライト（天窗）もあり、とても珍しかった建物です。

図-16は「富谷宿観光交流ステーション“とみやど”」で、前は内ヶ崎作三郎の生家内ヶ崎醤油店でした。

図-17は富谷新町にある坂で、ささやき坂（仮称）は京都の清水寺参道の産寧（さんねい）坂と似ています。

図-18は新町の里山風景です。東北工大の先生がトスカーナ地方（イタリア）に似ていると言っていました。またここからは、七ツ森や船形連峰が見えます。

宮原 高田さんからは富谷宿には様々な建物が残っていて、その一部がカフェになったり、公共施設にリノベーションされたりですが、まだ色々残っていることが分かります。

#### ◆街歩きガイドについて◆

宮原 これから少し議論をしたいと思います。

この宿場を中心とした街づくりは、地元の人たちが自分達の歴史を掘り起こしながら取り組んでいくということだと思います。

他所から来た人に街や歴史を案内するには、やはり地元に住んでいる人達の役割はすごく大きいと思います。

桑折でも探訪ツアーなどをたくさん実施しています。渋谷さんに地元の人をどの様に巻き込んでいるのか、また、ガイドをどの様にして養成しているのかを教えてください。

渋谷 ツアーガイド養成よりも、先ほどの奥州街道と羽州街道の追分整備を優先しました。平成2年から動きだして平成18年に完成しました。この16年間に各方面へのお願



図-15 丹野邸



図-16 とみやど



図-17 富谷の坂道



図-18 新町の里山風景

いとか、羽州街道の東根市六田などを終点の青森市油川まで、桑折の皆さんで訪ねて行きました。そして桑折の人達に関心を持ってもらい、少しずつ紹介できる様にして行くというのが、ツアーガイドになっていくのかなと思います。また、ボランティアではなくて有料にするのが良いと思います。お金を貰うと勉強をします。その紹介の仕方のヒントを長崎の案内人制度の「長崎さるく」などから勉強しています。

宮原 先ず地元の人達の関心を引くため他の街道沿いの街に皆で行って見て、自分の街だけでなく色々な街にも興味を持ってもらうということも大事だということですね。

また、「長崎さるく」は長崎市の街歩きで、たくさんのコースを持っています。京都市にも「まいまい京都」があります。

富谷はどうでしょう。この様に市民の人達が関わる街歩きを始めていますか。

高田 ありませんが、去年あたりから新町を活性化させようということで議論を始めています。

宮原 会場に一関市の「いわいの里ガイドの会」の白澤さんお見えですね。ガイド活動の紹介をお願いします。

白澤剛一氏 「いわいの里ガイドの会」の顧問をしています。私達は、市内探訪・骨寺村荘園遺跡・芭蕉の道などを案内しており、来年で20周年になります。

これまでの話から2点あると思います。1つ目は、ガイドの養成と組織の継続をどの様にしていくかです。設立する時のガイド養成講座は約30人が受講しましたが最終的に20人で発足しました。組織継続と会員の平均年齢を上げないため、約2年に1回養成講座を開催しており、現在約40名でキープされています。当初からの人は15%位で、新陳代謝がうまくいっているのかなと思っています。

2つ目は、ガイド費用の問題です。当初より行政から「ボランティアだから無料というのは長続きしないね。」という話があり、ガイド1名に15~20名の案内で、2時間3,000円、1時間超す毎に1,000円加算です。相手もお礼に困るでしょうからはっきりした方が良いと思います。

付け加えますと、安定的な業務量確保などのため、一関市から定点での案内業務を委託されています。内容は、市内にある武家住宅、骨寺村荘園遺跡交流館、新幹線駅での案内です。

宮原 レベルの高い方のお話しでしたが、富谷でも地域を案内する組織も必要になってくると思います。

#### ◆子どもの活動参加について◆

宮原 齊藤さんから子ども達も活動しているということでしたが、子ども達に活動へ参加して貰うきっかけはありますか。

齊藤 地元で児童数約600名の小学校があります。4年生の総合学習の中で一緒に活動しています。なぜ10歳なのかというと、4年生あたりがまだ生意気でなく、幼くもなく、ちょうど手ごろな年代です。「おしん」が奉公に出されるのが10歳です。「おしん」は国際的ブランドですから、皆が「なるほど、だから4年生か」と納得してくれます。

それから、中学1年生に蕎麦づくり体験の出前講座をします。この前は宮城県名取市第一中学校も来ましたが、試食までの体験ということで喜んで貰っています。



**宮原** 学校の総合学習とかに宿場の色々な資源を位置付けて、子ども達と一緒に活動出来る機会を作っていくということも重要だと思います。この様な活動例は多いので、富谷も学習に宿場を織り込んで行くことは面白いのではないかと思います。

#### ◆富谷宿の明日に向けて◆

**宮原** 先ほど高田さんと話した時に、富谷の宿場はこれから徹底的に歩いて色々なことを発見するといったことになれば良いのではないかということでした。高田さんから提案等があればお願いします。



図-19 5つの柱の提案

**高田** 私は5つの柱を提案したいと思います(図-19)。

一番は「デザイン」だと思います。講演で平川先生からアーカイブ・芸術性の提案がありましたが、やはり芸術性がないと人の心を感動させることが出来ないと思います。市が「デザイン会議」を設けても良いと思います。ここにお金をかけないと、これからは人を呼べません。

「食」は市長がスローフードの会長だったので心配ないと思いますが、あと「人」です。法隆寺宮大工の西岡棟梁が「木組は人組」と言いましたが、絶対に人が良く活動し、それをうまく組んでいかないと成り立たないと思います。この5つの柱を私は提案したいと思います。

**宮原** 新町は歩いてみると色々な発見があって、それをデザインしたりとか、食と組み合わせたり、することは大変に重要だと思います。渋谷さんいかがでしょうか。

**渋谷** 新町には、昨年11月に宮原先生の誘いで「開宿400年に向けたプロジェクト」のワークショップと先月の「富谷茶と宿場を楽しむ会」に参加しました。こんなに良い街が残っているのに今の新町通りは車優先で違和感があります。中央線がないので、外側線をもっと内側に移動して狭くしてしまえば良いと思います。そして、電線を地中化することにより、景観的にも更に素晴らしい街並みになると思います。

**宮原** 「ハード面の改良も歩く街には必要ではないか」というご提案でした。齊藤さんからありますか。

**齊藤** 私は「人」だと思います。今まで六田という地にならずとお世話になって、もう70歳超えている方もいます。その人達の考え方を聞いてみると、「こだい長い間、お世話になったんだもん、なんぼかでも六田から借りた今までの恩を返さんなねべした。ボランティアじゃなくて当たり前前の義務だべした。」ということです。会員は30数名ですが、この様な人が数名中心にいれば十分かなと思います。

大きな仕事をするというのは素晴らしい話ですが、我々は狭い場所で、経済的にも限られています。ましてや富谷の様な歴史的な建物もありません。そこでやっているのは「人」と、紅花と付く団体ですから「花」を重視しています。紅花は、連作を嫌いますから、合間にコスモスとか大根を地域の人にも参加して頂き植えています。

**宮原** やはり街に対する人の意識がとても大事だということ

とで、「お世話になっている恩返しというスタンスでやっている。」ということです。

今日、平川先生の講演で、富谷茶の話もあり、更に山椒のお茶も新たなものとして紹介して頂きました。

富谷の資源の可能性について、渋谷さんいかがでしょうか。

**渋谷** 先月、「富谷茶と宿場を楽しむ会」の帰りに「さとうや」で「鳳陽」を買って帰りましたが、すごい資源があった。内ヶ崎酒造店は、今見学出来ません。岩手県二戸市に「南部美人」の蔵があります。ここは見学も出来るし、もろみを樽からすくい試飲もしました。是非見に行ってください。

あと脇本陣の旧氣仙屋の奥の間には、明治9・14年の明治天皇東北北海道巡幸時に御小休所の玉座の間にもなった離れが残っています。また、「松前定御宿」と「八戸定御宿」の大きな木札や当時の漆器などがたくさんありますが、大変に貴重なものです。(「盛岡定御宿」は民俗ギャラリーに展示)

これらの公開は、行政が入って話し合えないと難しい感じがします。「とみやど」はすごいですが、これらも何とかして頂ければと思います。

**宮原** まだ色々な宝が眠っているということで、非常に楽しみな宿場町であるということです。

高田さんこれからの活動の展望みたいな部分でも結構ですし、一言お願いします。

**高田** お二人の話聞いて感じたのは、桑折は歴史の掘り起こし、六田宿は2つのキーワードがありました。その点、新町づくりは原点をまだ探しきれてないと思うので、その辺をもう一度洗い直す必要があると思います。「とみやど」のグランドオープンまでは半年ありますので、何とか起点を探せればと思っています。

**宮原** 宿場の街づくりについて、皆さんから色々なお話を頂きました。そして、これから宿場の街づくりをどの様に進めて行くかについて、今日は色々考えるスタート地点でもあると思います。

市民の方々が宿場を大事にしてきたからこそ、今ここに残っているのだと思います。これからスタートの新しい宿場の在り方の拠点として「とみやど」もオープンします。こういった新しい姿の中で、富谷宿の今後がとても楽しみだと思います。

#### ◆さいごに◆

最後に富谷へのエールを含めて、皆さんに一言ずつお願いします。

**齊藤** 富谷はかまねだって大丈夫、絶対うまく行く。こんなに一生懸命に市長さんはじめ皆さんが頑張っているからと感じました。

更に山椒茶もあります。私の店では「よくござったなっす。またござってけらっしゃい」という中で、「お茶あがっしゃい」と言うと、ちょっと座ります。そこで色々な話が生まれ、人の輪が広がる。山椒のお茶は珍しく、「ねえたって飲んでみてな。ちえっと俺さも飲ませる」みたいな感じで人の輪を広げるためには本当に素晴らしい、是非このお茶を皆さんで広げれば、成功の基になると太鼓判を押したいと思います。「色々あり過ぎて富谷は困った。」という感じだ

《13ページに続く》



《12 ページより》

と思います。これからの皆さんのやりようを私達の小さな宿場の活動の参考にして、頑張っていきたいと思いました。

**渋谷** 富谷宿は今行政の方が先行している様な状態で、民間の方でついて来られないのかなと思っています。これから人づくりのため、チョットずつ興味を持って貰いながら、例えば先ほどの道づくりから始めていけば良いのかなと思っています。

**高田** 今日はありがとうございました。これらの意見を肝に銘じて、街づくりをやっていきたいと思っています。

**宮原** 今日、富谷宿の街づくりの新たなスタート点に立ったということで、市役所もそうですが、市民の皆さんがもつ

と積極的に関わる場を創っていったり、皆さん自身が創っていくことが大事だと思います。

これらの活動で、未だ色々な発見が富谷にはありそうなので、そういった「古いけど新しいもの」をどんどん発掘して、富谷をこれからも活性化していただければと思います。

とうほく街道会議としても、応援をして盛り上げたいと思いますので、これからもよろしく願います。パネリストの皆さん、有益な話をありがとうございました。

(図は、各パネリストの説明画像を抜粋・編集したものです。)

## プロフィール

### 記念講演：講師



だて やすむね  
**伊達 泰宗 氏**

伊達氏 34 世  
仙台伊達家 18 代当主

東京生れ、仙台市在住。伊達氏宗家 34 代当主。  
宮城教育大学修了。東京国立文化財研究所、宮内庁書陵部を経て、(財)瑞鳳殿勤務。(公財)瑞鳳殿名誉資料館長、(公財)東北放送文化事業団理事、(一社)伊達家鳳文会総裁、仙台藩志会総裁。  
著書：『独眼竜政宗の素顔』(共著、宝文堂、1996 年)、『伊達泰山文庫シリーズ 現代版伊達治家記録全 10 巻』(伊達家伯記念會、2004 年)、『伊達家の秘話』(共著、PHP 研究所、2010 年) ほか

### 基調講演：講師



ひらかわ あらた  
**平川 新 氏**

東北大学名誉教授

福岡県生れ、仙台市在住。東北大学名誉教授。前宮城学院女子大学学長。  
主な書著：『紛争と世論—近世民衆の政治参加』(東京大学出版会、1996 年)、『開国への道』(小学館、2008 年)、『戦国日本と大航海時代 秀吉・家康・政宗の外交戦略』(中公新書、2018 年、2019 年和辻哲郎文学賞受賞)、『仙台藩のお家騒動—四代藩主綱村の伊達騒動』(大崎八幡宮、2019 年) ほか

### 分科会：コーディネーター



みやはら いくこ  
**宮原 育子 氏**

宮城学院女子大学  
現代ビジネス学部教授

東京生れ、山形県高畠町在住。旅行会社に 11 年間勤務後、昭和 64 年明治大学文学部史学地理学科に入学し、以降東京学芸大学大学院を経て東京大学大学院博士課程修了。平成 9 年宮城大学事業構想学部。平成 28 年 4 月から宮城学院女子大学現代ビジネス学部長を経て現在に至る。  
宮城大学名誉教授。平成 29 年 8 月とうほく街道会議会長。

### 分科会：パネリスト



たかだ ひろぶみ  
**高田 洋文 氏**

月建築設計室代表  
地域歴史文化遺産  
保全活用推進員

富谷町(当時)生れ。  
富谷町にて大工修行後、京都にて設計事務所勤務。京都にて一級建築士資格を取得後、仙台に帰り設計事務所勤務。平成 7 年月建築設計室設立現在に至る。みやぎ木造住宅耐震診断士、応急危険度判定士、宮城建築士会会員。

### 分科会：パネリスト



しぶや こういち  
**渋谷 浩一 氏**

桑折町商工会会長

福島県桑折町生れ・在住。  
昭和 58 年東北学院大学工学部卒業。  
現在、桑折町商工会会長、福島県北商工会連絡協議会理事、福島県伊達郡商工会広域連携協議会会長、桑折町都市計画審議会委員、桑折町文化財保護審議会委員、桑折町文化財保存会保護顕彰部会会長。  
街道に関する活動：ふくしまけん街道交流会事務局長、羽州街道交流会代表幹事、とうほく街道会議副会長、万世大路研究会代表幹事ほか多数。

### 分科会：パネリスト



さいとう ぶんしろう  
**齊藤 文四郎 氏**

グループ風に揺らく  
紅花六田宿代表

山形県東根市六田生れ・在住。  
グループ風に揺らく紅花六田宿代表、東根市観光物産協会会長、令和 2 年度山形県知恵袋委員会委員、山形県食育名人。  
東根市内の六田麩街道沿いで江戸時代末期から焼き麩製造を営む 6 代目。また、精進麩懐石料理処「清居」も併設し営業する傍ら、学校遠足の受入等による食育にも尽力。六田地区においては、まちづくり団体を立ち上げ、芭蕉に扮した観光ボランティアガイドも務めるなど、紅花をツールとした地域活性化を図っている。



【開会式・事前レクチャー】(9:30～10:30)

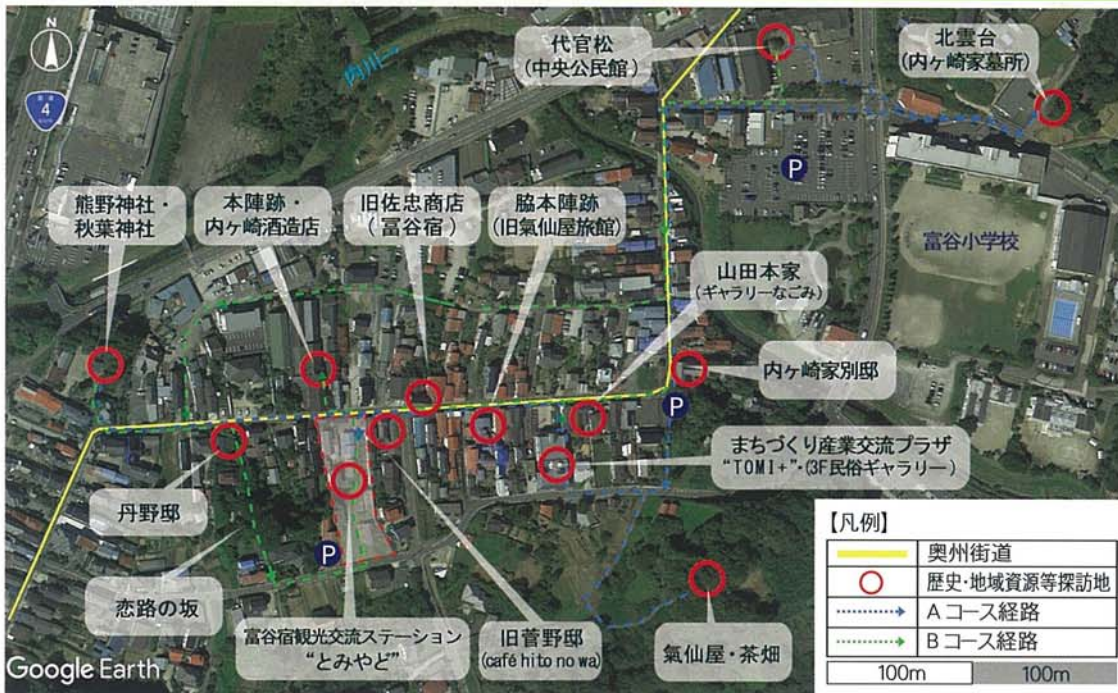


宿場の歴史や見どころについて、ガイドのAコース：清水勇希氏 (富谷市教育委員会学芸員) とBコース：高田洋文氏 (地域歴史文化遺産保全活用推進員) から説明を頂きました。

(参加者) Aコース:20名・Bコース:17名 ※ガイド・スタッフ除き

**【Aコース】** (10:30) 富谷中央公民館・代官松～北雲台 (内ヶ崎織部墓石文)～下町散策～内ヶ崎家別邸 (外観のみ)～氣仙屋・茶畑～脇本陣跡・明治天皇御小休所～富谷市まちづくり産業交流プラザ“TOMI+”(昼食)・(富谷市民俗ギャラリー)～旧佐忠商店 (富谷宿)～富谷宿観光交流ステーション“とみやど”～熊野神社～中町散策～中央公民館解散 (14:00)

**【Bコース】** (10:30) 富谷中央公民館・代官松～下・中町散策～熊野神社～丹野邸 (外観のみ)～恋路の坂～富谷宿観光交流ステーション“とみやど”～本陣跡 (内ヶ崎酒造店)～旧菅野邸 (café hito no wa)～脇本陣跡・明治天皇御小休所～富谷市まちづくり産業交流プラザ“TOMI+”(昼食)～旧佐忠商店 (富谷宿)～山田家住宅 (ギャラリーなごみ/外観のみ)～内ヶ崎家別邸 (外観のみ)～中央公民館解散 (14:30)



【凡例】

	奥州街道
	歴史・地域資源等探訪地
	Aコース経路
	Bコース経路

100m 100m







出展団体名	パネル内容	枚数			
とうほく街道会議	あゆみ・活動紹介、『増補行程記』の富谷宿	9枚	NPO 法人東北みち会議	奥州街道ほか	8枚
みやぎ街道交流会	活動紹介・仙台城下絵図	5枚	関山街道フォーラム協議会	活動紹介	5枚
			芭蕉の道・案内人協議会	小国街道探訪会紹介	2枚

【会場の様子ほか】 ※6日は、宮城学院女子大学現代ビジネス学部「ビジネス課題研究」宮原ゼミの3年生9名の方々にスタッフとして協力頂きました。



## コラム 2 内ヶ崎作三郎

内ヶ崎作三郎は、明治10年に富谷新町で生まれました。生家は1864年(元治元年)開業の当時、穀物問屋であった内ヶ崎醤油屋です。

旧制第二高等学校を経て、明治21年に吉野作造らとキリスト教の洗礼を受け入信しました。明治34年に東京帝国大学文科大学英文科卒業後、宗教研究のため英国のオックスフォードにあるマンチェスター学院に留学。帰国後は早稲田大学の教授として教壇に立たれました。

大正13年に憲政会に所属して衆議院議員に当選、内務参与官、文部政務次官を歴任した後、昭和16年から昭和20年までの4年間、衆議院副議長の要職を務めました。

また「白中黄記」「近代人の信仰」「リンカーン」の著書も残しています。

作三郎氏の墓は、内ヶ崎家の墓所北雲台にあり、死後、作三郎氏の活動を啓蒙するために富谷小学校に建てられていた記念の胸像は、来春オープンする富谷宿観光交流ステーションに移築しています。

## コラム 3 富谷茶の歴史

富谷は茶の名産地でした。富谷茶の発祥は、仙台藩祖伊達政宗公が京都から苗木を取り寄せ、領内で栽培させ、領内で拡大していったことに始まるとされています。

仙台藩における茶栽培の最も古い記録は、元和3年(1617年)の政宗公の書状で、仙台藩で栽培した茶一袋を贈るときの添え状で、「これからは『奥州の宇治』と呼ばれるだろう」と冗談めかしつつ自慢しています。政宗公が仙台を開府し、新しい国づくりの産業政策の一つとして、茶栽培に力を注いだのではないかと、富谷宿と富谷茶は、その過程で発展していったと考えられるとのことです。

富谷宿開宿から130年後には、富谷宿は茶畑に囲まれ、他藩にも茶が名物と知られ、かなり隆盛を極めていたようです。

しかしその後、明治から大正にかけて生産農家は30軒ほどとなり、昭和30年頃には旧脇本陣の旅館気仙屋(現在は廃業)が、自家用に製茶をするのみのとなり、昭和40年代にその製茶もやめ、富谷茶は幻の銘茶となってしまいました。

気仙屋の茶畑はその一部が今も守られています。

(『広報とみや』(2020・7月号)を参考)

### 【富谷宿大会における新型コロナウイルス感染防止対策について】

- ① 参加申込みチラシに感染対策の留意事項を記載し、注意の呼び掛け。
  - ・発熱・咳・咽頭痛・鼻水・鼻づまりのある者、2週間以内に感染流行国又は国内の感染流行地域へ旅行・出張者の参加辞退等
- ② 事前申込み及び当日参加者の氏名・住所・電話等の連絡先把握
- ③ 会場玄関にスタッフを配置し、参加者のマスク着用、検温及びアルコール消毒の確認
- ④ 「3つの密」を避ける対策の実施
  - ・会場入口扉の常時開放、及び休憩の頻度を多くして、その都度会場の左右4ヶ所の扉を開け換気を実施
  - ・会場の席間隔を大きくし、定員の約60%に設定
  - ・「マスクの着用」・「咳エチケット」の励行、会場で大声や近接距離での会話等を避ける
- ⑤ 演壇・分科会席等に飛散対策として、透明アクリルパーテーションを設置
- ⑥ マイクは、使用者毎に除菌シートにより消毒

### 【表紙図絵解説】『増補行程記』(ぞうほこうていき) 画:清水秋全(しゅうぜん)/寛延4年(1751)

- ◆江戸から盛岡までの奥州街道を描いた道中図(乾・坤(けん・こん)2分冊)。8代盛岡藩主南部利視(としみ)の命により、藩士の清水秋全が描いて献上したものだ。
- ◆街道に沿って、宿駅、一里塚など道々の風景を写実的に描写するとともに、各地の名所・名物や伝説、古歌なども記されている。参勤交代のルートを描いており、各頁での方角は一致していない。(以上「もりおか歴史文館だより」を参考)
- ◆『増補行程記』の「増補」とは、ほとんどの帖に朱書きで加除訂正が施されていることから、「増補版」という意味をもたせたものであろう。(細井計氏)